

ふ事のごとし卯の花のさきぬる月なれば卯月といふ也といふ説のごとき、まかるべしとも思はれず、ウツギといふ木は、其中のウツボなれば、ウツギと名づけしに、其花のたま〜卯月にさきぬれば、卯花などとまるせし也。

〔倭訓栞前編四〕うづき 卯花月ともいふの義といへり、四月には此花盛り也、又周正の四月は卯月也と、詩の注に見えたりともいへり、

〔古今要覽稿時令〕うづき 四月 うづきは四月の和名なり、ふるくより所見あり、時當四月之上旬

と古事記詞いひ、戊午年夏四月と日本書紀いひ、八重疊平群乃山爾四月與と萬葉集いひ、宇能花能佐久都奇多知奴とも同上みえたり、今少し世くだりては、うづきにさける櫻をみてと古今和歌い

ひうづきとて、咲うの花にこつたひてと秘藏抄いひ、うの花月をなにといはましと莫傳抄いひ侍る

は、萬葉集のうの花の咲月立ぬといふによりしなり、又卯の花月夜さかりすぎ行と藏玉抄いひ、四

月うづきと八雲御抄みえたり、さて四月を卯月と名付たる義を解きしは、奥義抄に、うのはなさかり

にひらくる故に、うの花月といふをあやまれりとみえたり、下學集萬葉考別記類聚名物考、歳時

に、り扱また四月の異名のごとくにいたりては、秘藏抄などに出たるを、はじめとやいはん、いは

ゆる此月をこのはとり月と秘藏抄いひ、又夏初月と莫傳抄いひ、多りばの月と藏玉抄いひ、花殘月と

同上いひ、又首夏と和名類聚抄いひ、孟夏と年中行事抄いひ、つるも漢名なり、仲呂と拾芥抄いふは律名なり、是

則禮記月令に、其音徵律中、中呂といふによりしなり、

〔日本書紀神武〕戊午年夏四月

〔日本書紀通證神武〕四月種月也、播種之義、古説爲卯花月、詩註、周正四月卯月也。

〔萬葉集 十八〕四月二十年一日、掾久米朝臣廣繩之館宴歌四首、

宇能花能、佐久都奇多知奴保等登藝須、伎奈吉等與米余、敷布美多里登母、